

内科・糖尿病内科 担当医師 井口昭久教授の随筆が掲載されました。

(名大医学部学友時報 第743号 2011年12月22日発行)

人生
山あり谷あり

第9回 「秋の健康相談」

名古屋大学名誉教授
愛知淑徳大学教授

いぐち あきひさ
井口 昭久

私の住んでいる地域には秋の初めに祭りがある。小学生が小さなお神輿を担いで周辺を回っている間に、大人たちがテントの下で、おでん、焼きそば、綿菓子などを作って待っている。

小さな公園の一隅に「けんこう相談」という場所がある。私はその相談役として近くの診療所の看護師とテントの下で座っていた。日向にいと汗が出て背中が痒くなるが、テントの下に入ると寒かった。季節の変わり目である。

健康な人が集まるので相談に来る人はほとんどいなかった。健康な人は健康を相談しない。ぽっちゃりとした若い看護師が隣に座っているからか、「結婚相談」と間違える人もいた。

「老後は地域との付き合いが大事である」などという高齢者の人生の過ごし方を書いた本が売れているらしい。

私も老人に関する本を書いたがさっぱり売れなかった。

「老人になると新しい人生が出発する」と勘違いさせる本が売れているようだ。

老人になって身を置く場所が変わったからといって、違う人間に変身することはない。

私はアメリカに渡って生活をしたことがあった。

アメリカに渡れば、それまで生きてきた青春時代の垢と、後悔を洗い流して新しい生活が始まると思ったものだった。

私の汚れちまった悲しみを彼の地の住人は知らない。名古屋大学がどの程度の大学であるか、アメリカ人にとって日本の大学はどこでも同じである。その大学で尻尾の方から卒業したことなど彼らにとってどうでもよいことだ。

新しい世界、日本語以外の言葉、新しい友人。新しい仕事。

そして田舎の長男の苦悩から解放されるかもしれない。その頃、母親の待つ信州へ帰って開業しないことが私の後ろめたさであった。

ロッキー山脈を越える飛行機の中で初めてのアメリカに興奮した。

しかし意地悪な人間は人種に関係なく存在し、隣に住む人が善人とは限らないことがすぐに分った。正直者と嘘つきがおり、見栄っ張りや恥ずかしがり屋がおり、馬鹿と利口がいる。その中間にそれぞれのグレードがあって、そういう人たちが暮らしているにすぎなかった。

アメリカで生活しても田舎の長男の悩みは消えることはなかった。

健康相談は、たまに血圧を測って下さいと老人が来る。「綺麗な人に測ってもらおうと血圧が高くなるよ」と言って隣に座っている看護師に測ってもらった。血圧が高く出ると看護師は笑顔になった。

反省会では酒が出た。酔って帰る夕方の道は肌寒く、空は信州の秋のように青かった。